

特別講演 2

「間質性肺疾患の診断・治療における病診連携の重要性」

福井大学医学系部門内科学（3）分野講師

早稲田 優子 先生

2008年に抗線維化薬であるピルフェニドン、2014年にニンテダニブが特発性肺線維症(IPF)に対して保険適用になってから間質性肺疾患(ILD)の診断と治療は大きく変化した。

その経過には進行する線維化に対して抗線維化薬が使用できることとなり、これまでステロイドや免疫抑制薬しか持ち駒がなかったILDに抗線維化薬は大きな光となっている。

特にIPFでは早期に診断・治療することにより予後が変わり、早期に“線維化病変を探す”ということが臨床医の大きな課題となっている。ただし、日本は世界と比較してIPFの診断や治療に時間がかかっていること、その原因としては専門医に紹介するまでに時間がかかっていることが報告されている。

早期診断・治療を行うことで予後の改善が見込めること、また60歳未満であれば肺移植も考慮できることより、クリニック・市中病院と専門病院の病診連携が非常に重要な鍵となる。本講演ではスムーズな病診連携のために必要なことを中心に最新のILDの診断・治療についてお話したい。